

アブラツノザメ 日本周辺

North Pacific Spiny Dogfish, *Squalus suckleyi*

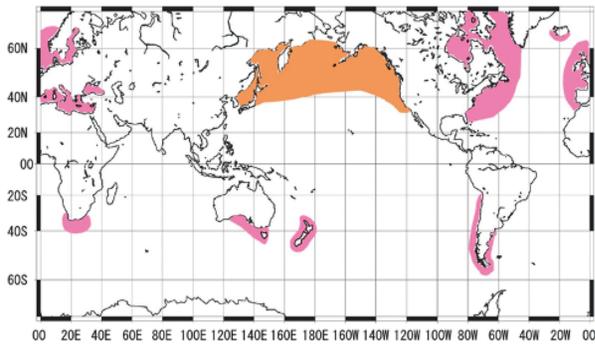


管理・関係機関

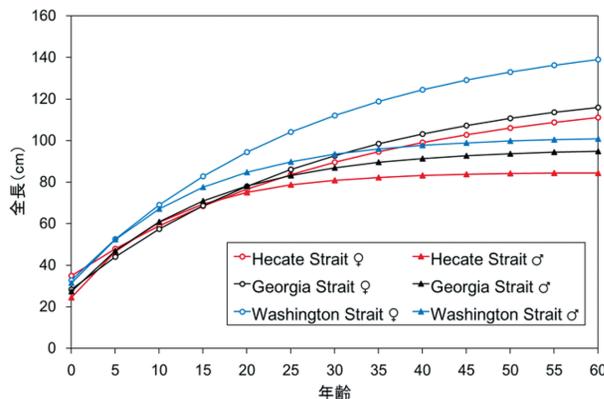
なし

生物学的特性

- 体長・体重：雌：全長 120 cm・7.9 kg、雄：全長 95 cm・3.2 kg
- 寿命：60 歳以上
- 成熟開始年齢：雌 23 歳、雄 14 歳
- 繁殖期・繁殖場：2～5 月、繁殖場は調査中
- 索餌期・索餌場：調査中
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：東北地方太平洋岸沖のマダラの胃内容物として出現



アブラツノザメ類の分布
オレンジ色：*Squalus suckleyi*、ピンク色：*S. acanthias*。



カナダ西岸のアブラツノザメの雌雄別海域別年齢-全長関係

利用・用途

第2次世界大戦前後は、ビタミンAや肝油の原料として高い需要があったが、合成ビタミンAの普及によりアブラツノザメ漁業は衰退した。東北地方では刺身や煮物、照り焼き等で食されるほか、ちくわ等の練り製品原料として利用される。また、近年では肝油や軟骨エキス等健康補助食品の原料としても利用されている。

漁業の特徴

北日本の太平洋側や日本海側では、少なくとも江戸時代から漁獲されていたが、漁獲対象として注目されるようになったのは明治30年代末頃からであり、北海道や青森、秋田、石川県等で当初はマダラ等を対象とした底はえ縄漁船の兼業対象種として漁獲された。その後、昭和初期に機船底びき網で漁獲されるようになった。太平洋戦争後は食糧増産政策に伴い主に機船底びき網により積極的に漁獲され、漁獲量が増加した。その後、本種の漁獲量は、1950～1960年代の合成ビタミンAの普及による国際取引の減少とそれに伴う魚種単価の下落により急激に減少した。現在、本種の主な漁獲は、以前に比べて本種を主対象とした操業が減少した沖底と本種を漁獲対象とする底はえ縄漁業により行われており、さめ類全体の漁獲量より推定した本種の漁獲量は1990年以降2,700～4,600トンで比較的安定して推移しており、2016～2018年は約3,000トンとなっている。

漁獲の動向

本種について、国際的な漁業管理機関による資源評価は実施されていない。資源状態の指標値として、1972年以降の沖底漁獲成績報告書から集計した太平洋北区のかけまわし(1そうびき沖底)のCPUEと、主要な漁場である津軽海峡周辺における1979年以降の青森県の底はえ縄による漁獲量及び延べ操業隻数から求めたCPUEを用い、資源の動向を検討した。

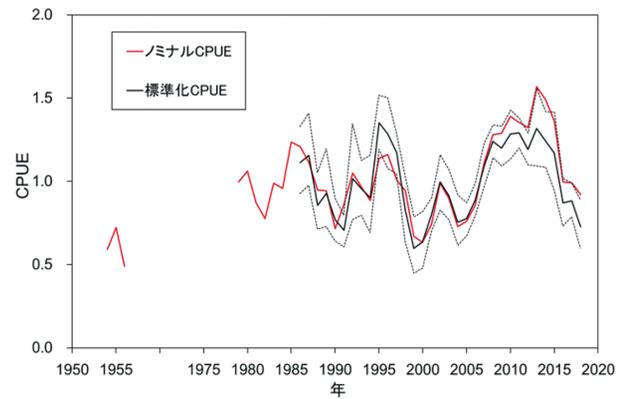
太平洋北区においてアブラツノザメの漁獲が多いのは襟裳西～尻屋崎海区で操業する青森県のかけまわしである。かけまわしによるCPUEは1972年以降2000年頃まで減少傾向が認められたが、それ以降は近年に至るまでやや増加傾向にある。分布域の中心にあり、アブラツノザメを狙った操業が行われている津軽海峡内の底はえ縄では、近年のCPUEが2000年代前半の約120%の水準を示しているが、過去5年のCPUEには減少傾向が認められる。さらに、底はえ縄の1979～2018年のノミナルCPUE(標準化されていないCPUE)は、1954～1956年と比較高い水準にある。

資源状態

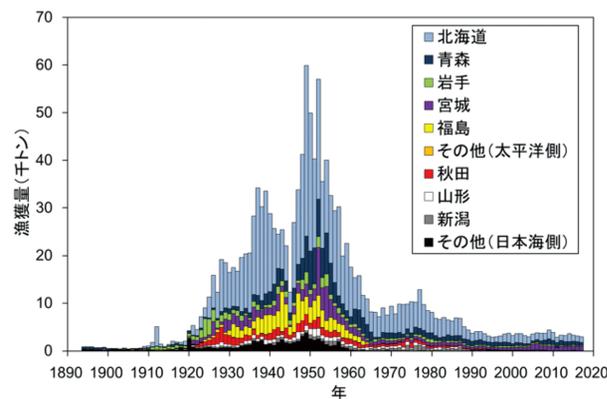
太平洋北区のかけまわしのCPUE及び日本周辺海域において本種の分布の中心に近いと想定される津軽海峡内で本種を漁獲する底はえ縄漁業のCPUEの解析結果から判断すると、日本周辺における近年のアブラツノザメ資源は中位水準にあり（CPUEの過去最大と0を3等分し、上から高位、中位、低位とした場合、かけまわし及び底はえ縄のCPUEはともに中位と評価）、東北太平洋側では横ばい傾向、津軽海峡では減少傾向と判断されるが、津軽海峡の減少については長期的な増減から判断して変動の範囲内と考えられる。

管理方策

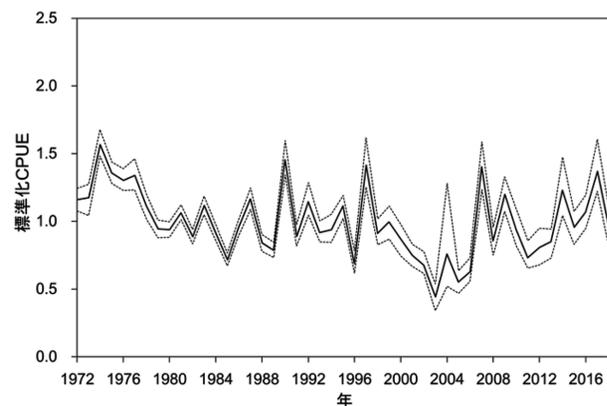
津軽海峡で操業を行う底はえ縄漁業者により小型魚や出産への貢献度が高いと考えられる高齢魚の再放流及び漁獲量上限の設定等、資源保全に向けた自主的な取組が行われているが、公的な管理方策は実施されていない。なお、2007年のワシントン条約第14回締約国会議及び2010年の第15回締約国会議では、EUから附属書IIへの掲載が提案されたが採択されず、その後掲載提案は行われていない。



津軽海峡内で操業を行う底はえ縄のノミナルCPUE（標準化されていないCPUE）と標準化CPUE
1986～2012年の三厩及び2007～2018年の大間の漁獲データを用いた（各CPUEは1が平均値となるように基準化、破線は95%信頼区間の上限値と下限値）。



さめ類漁獲量から推定したアブラツノザメの漁獲量



太平洋北区における沖底（かけまわし漁法）の標準化CPUE
標準化CPUEは1が平均値となるように基準化、破線は95%信頼区間の上限値と下限値。

アブラツノザメ（日本周辺）の資源の現況（要約表）

資源水準	中位
資源動向	横ばい（東北太平洋側） 減少（津軽海峡）
世界の漁獲量（最近5年間）	調査中
我が国の漁獲量（最近5年間）	2,722～3,633トン 最近（2018）年：2,722トン 平均：3,149トン（2014～2018年）
管理目標	検討中
資源評価の方法	かけまわし及び底はえ縄のCPUEにより水準と動向を評価
資源の状態	検討中
管理措置	検討中
最新の資源評価年	実施されていない
次回の資源評価年	未定